

親切な人とは、どんな他人か—人間関係としての親切論—

近藤 良樹

1. よく気がつき思いやりのある人

「親切」は、困ったり求めをもっているひとに対して、ささやかな手助けをすることである。困っていない者にする場合は、親切ではなく、よけいな世話やお節介になり、負担の大きいものは、親切を超えてしまう。親切にする人は、その辺りを心得ていなくてはならない。では、困っているひとに対してその微妙なところを心得つつ、親切をするひとというのは、どんな特徴をもっているのでしょうか。

(よく気のつく人) 親切は、ひとりでは出来ず、その相手がいる。われわれの親切を受け取ってくれる相手は、他人であり、しばしば、見も知らずの行きずりのひとになる。この困っている相手を見つけなくては、親切は、実行できない。だが、よそ見をしないで、ひたすらに目的に向かっている者には、他人の求めとか困っている姿は、目に入らない。とくに、困苦を隠している場合は、強いて親切を求めることもないから、これに注意しているひとでないと、親切にすべき相手に出会わない。親切には、ひとの困苦・求めの発見がなくてはならない点で、周囲に気を配るひとであることが望まれる。

親切にするその相手を発見するひとは、単なる好奇心旺盛な、詮索好き、知りたがり屋とは、ちがう。困っているひとに目を留める、求めるものがあるのではと推測する、優しい思いやりある目をもったひとである。周囲をきょろきょろと見回しているひとがあるが、たいていそういうひとは、親切ではない。かれは、ものごとの表面的感覚的な多彩さに気をとられていて、ひとの内的な思いへの気付きは皆無だからである。かれには、親切にすべき相手は見えていない。

(思いやりの気持のあるひと) 困っていること・求めに気付くには、その外面を通して、その人のところに思いをはせることができるのでなくてはならない。相手の立場になってみるという、思いやりの精神がなくては、困っていることには、気がつきにくい。相手の思いを察するのであり、自分の好意の「思い」をあげる(「やる」)のである。

相手の立場に自分をおいてみてはじめて、困っていることに思い至ることがある。親切なひとは、そういう思いやりがあって、ひとの求めるもの・困っていることによく気がつくのである。電車などで、若者がいるのに彼らではなく老人が老人に席を譲ろうとする光景を見かける。座っている老人は、立っている老人の気持ちがよくわかるので、おのれの分際を忘れて、ついゆずらねばという気になる。若者には、親切心がないのではない。声をかけると、気がついて席を譲る。困っていることに思っていたことがなく、気がついていないのである。

(日本では、親切な人とは、他人になる) われわれは、親切を家族にはいわない。ささ

いな援助としての親切は、他人に限定される。つまりは、される者からいうと、他人が親切にしてくれるのである（家族内でも例外的に他人行儀になる場面においては親切をいうことがある）。われわれは、家族には、過剰なぐらい思いやりをもつ。孫が、電話で、「おれ、俺」と泣き付いてくると50万や100万なら、即座に、銀行に振り込んでやる。だが、それが他人だとわかったときは大変で、犯罪として警察ざたとなる。われわれは、家族には超親切であるが、他人には冷たいのである。他人にするものとしての親切は、ほんのささやかな手助けをすることにと限定される。

ただし、これは、日本的なことであって、欧米では、親切（英語の kindness やドイツ語の Freundlichkeit）を家族にもいうようである。個人にとって家族とそとの敷居はわれわれほどではないのである。もちろん、敷居を無視して超親切の思いやりを他人にもしていくということはあるから、他人への冷たい振る舞いを、家にももちこむということになる。本物の孫にも冷たいので、「オレ、オレ」詐欺は、成立基盤をもたない。

われわれの親切は、単なる贈与・慈悲ではない。他人同士であることを越えず、ささやかに触れ合うことにと限定して、優しい思いやりを発揮するのである。その限度を、親切にするときの思いやりは、ふまえている。自制した遠慮のある思いやりである。

親切では、これを求めるひとも、ささやかな手助けだと前提して親切を受け入れるのである。道をたずねただけなのに、しつこくついて来て、過剰な手助けをされるのでは、親切を受け入れることはできなくなってしまう。軽く触れ合うのみに留めることを相互に承知して、親切は成立する。

（好意的なひと、善意のひと）親切にする人は、好意的な人である。好意は、親切同様、家族にはいわない。好意は、あくまでも、他人に抱くものである。好意は、相手になんらかの引かれる価値を見出し、これに近づきたいと思うことであり、あるいは、これを肯定的に理解し温かく受けとめて、贈与的な気持ちをもつことである。好意は、やがて濃い愛にまで進むこともあるが、なお、それは、他者同士の垣根を取り払うものではない。家族のうちでの深紅の濃い愛に対して、それは、ほのかな薄紅の愛である。好意と親切は、同じように、他人に近づき他者距離を越えない限度で贈与的にかかわる。ただし、好意は、持続的であり、その相手が困っていないのみか、親切にされる側に立っても抱くが、親切にするのは、困っている者に限定される。

親切は、善意の気持ちでもする。善意も、他人に抱くものである。家族に他人行儀な善意などもつことはない。善意は、他人に善いことをと願い、そう意欲するのである。好意は、利己的に好きな者を近寄せたいときにいただくこともあるが、善意は、利己的ではない。あくまでも、利他的であって、相手のことを思い贈与的なのである。親切でいうと、善意からするひとは、弱者や受難者を優先して、公正にその手助け・贈与をする。好意からするひとは、場合によると、好きなひとを優先する。

2. あまり人見知りしないひと

困っているひとを見つけ出して、好意の思いやりをもって、それだけでは親切にはならない。親切は、実行されてはじめて親切である。思いから実行への移行が気軽になされなくては、親切な人間とはなれない。それには、まずは、困っているひとの実際を（場合によると余計なお節介になるかも知れないから）確認することが必要で気軽に声をかけられるのでなくてはならない。

親切の相手は、多くは、見も知らずの他人になるので、人見知りする者は、はずかしさがさきに立って近づくことがむずかしくなる。相手が美人であったりすると、恥ずかしがり屋の若者は、「下心がある」と疑われるかとも思って、親切な気持と、実行をためらう羞恥心のあいだで、動きがとれなくなる。

われわれは、内では元気で強いのだが、外に出るととたん、見知らぬ者の前では、臆し萎縮してしまうことがある。内弁慶である。そとにでると、まるで別人になって、おじけて恥ずかしさに負けて活動どころではなくなることもある。親切は、そとで見知らぬ者にすることが普通なので、内弁慶のひとにとっては、苦手な対応となる。周知したひとになら、即座に応じて親切にするひとであっても、そういう内弁慶のものは、そとの見知らぬひとの前では、たじろぎ、おじけづき、行為へと踏み出すことができない。親切心は、大いにもっている、外人に話しかけられそうになると、あわてて、逃げだしたり、話せない素振りをするようになる。

はずかしがり屋では、第一に相手を見ること、見られることを避けたいと思っているので、困っているひとに気がつくことが少なくなる。親切のための状況認識すらしがたくなってしまふ。困っていることが見えたとしても、こちらから声をかけるまでに進むことはますます少なくなる。

(恥ずかしいのは、どうしてか) われわれの多くは、親切の思いは十分にもっているのだが、恥ずかしくて、なかなか実行にまで踏み出せないで終わってしまう。羞恥心が、親切の実行にブレーキをかけていることがある。「恥ずかしさ」は、自己の属する集団とその規範から「はず」れる事態に直面し、自身これを否定的なことと見なし、「はずれ」ないもとの状態に戻りたいと思い、かつ、この「はずれ」を見ている否定的な目のあることを意識して、その「はずれ」の危機に防御的な反応体勢をとろうとするもので、はずれることを自制させる感情である。

親切は、多くは、偶然的な出会いに求められるもので、常態からは「はず」れた行為で、かつ、まわりの他のひとは、その親切をしないのであって、親切にすることは、その場では、「はず」れた行為となる。しかも、しばしば多くの見る目がある。もちろん、それは、批判する目ではないはずなのだが、「見ている自分たち全員とはちがう、はずれた目立ちたがり屋！」という冷ややかな差別する否定的な目と受け取れる。そういう目を感じ、群れからはずれることを嫌うわれわれは、その親切という「はず」れた行為には、はずかしさをいだきやすく、それを思うと、親切心はあっても、つい実行をため

らうことになる。

まわりを気にするのが、われわれの特徴である。まわりを気にするから、困っていることにも、よく気がつくのだが、これに親切にするとき、それを一人でするときには、ひとの目が気になり、気恥ずかしさを感じて、自分の行動にブレーキがかかってしまう。よいことであっても、皆から「はず」れると、われわれの場合、恥ずかしいのである。

(だが、羞恥のたがをはずすのも、問題である) 羞恥心は、自己に守るべきものがあるときに、防衛反応としていだかれる。守るべきもの(美とか理想とかの規範価値)のない者には、その意識は成立しにくい。価値とするものから「はず」れても、そこに復帰・到達することは無理と断念して、その「はず」れを居直ってしまい(つまりは、その現状を当り前とし、「はず」れているとは思わなくなり)、見る目があっても、「それで、どうだというのよ!」と、好奇の批判的な目をはねのける図太さを身心がもつようになると、厚顔となり恥じらいはもてなくなる。

「はずかしがるような歳ではない…」というのは、はずれるべきでない規範自体をもたないか、自分の現実の方に(美や理想の)規範を引き下げる生き方を身につけ、さらには、見る目があってもこれを気にすることのない状態になっている歳をさす。性的な羞恥心でいえば、その歳は、心身が生殖・養育にふさわしい上限下限の歳からはずれた男女になる。

羞恥のたがをはずす歳になると、周囲の自制させる目を気にすることはなくなり、非自立の心性の顕著な者では、これがところかまわず顔をだしてくる。見も知らずの他人と出会うことにもとづくになれて人見知りするどころか、これが常態化して、どこにあってもなれなれしく、ひとがいると親切にしたいくなり、しばしば「よけいなお世話」「お節介」をやいてしまう。

3. 実行力・行動力の豊かなひと

親切にすべきことは、よく分かっているし、人見知りをする歳でもないのだが、親切の実行にまで至らない人がある。腰の重い人である。これに対して、現に親切なひととは、労を惜しまないひとであり、実行のひとである。恥ずかしくて親切にまで進めないひとは、相手が困っているから助けて欲しいといえ、引き受けることが容易になり、親切は実行される。だが、腰の重いひとは、そうなっても動くことをためらう。

「あるべき Seinsollen」ことから、「なすべき Tunsollen」ことへとすすんでいく必要がある。一般的に、親切であるべきだと思っただけでは、親切は成就されない。それを自分が引き受けて、自分がなすべきだと自覚して、実行することが大切となる。親切の落ち着くところは、相手の困苦への手助け、求めの成就である。いくら、親切心があっても、実際に手助けがなされないのでは、親切は絵にかいた餅である。

ただし、余計なお世話になりそうな場合は、親切の「気持だけで」十分である。「お気持ちだけ頂いておきます」と言われる場合、ときに、遠慮してそういうこともあるが、

親切に関しては、ささいな手助けであるから、遠慮であるよりは、多くが本心であり、気持ちだけにとどめる方がよい。

(同情とちがう点) 親切と同情は、受難・困惑の他者への思いやりとして、その妥当範囲が重なるが、そのあり方において異なった点がある。いずれも、他人に、傍観者としてかかわるもので、その点で、あたたかい家族への思いとは異なり、同じように冷たさをもつ。だが、同情とちがい、親切は、傍観者にとどまっているのみでは、その親切を成就できず、ことの当事者となるのでなくてはならない。その相手に接触して、その困っていること自体に関与していく必要がある。

同情の場合は、その相手を傍観しているのみでもよい。観客にとどまっていたよい。しかし、親切は、同情とは異なって、「まあ、かわいそうに！」と観客にとどまっていたのでは、思い半ばにとどまり、親切とはならない。観客であったのだが、突如、舞台から呼びかけられて舞台の手助けをすることを求められるのである。舞台にほんのささやかではあるが、登場することになる。その決意がなくては、親切は、成就されない。

(腰は軽いが、逃げ腰ではいけない) 実行になかなか至らない腰の重いひとがあるし、即行為に踏み出す、軽いひとがある。日々の習慣となり、性格とすらなっている。ぐずぐずして、思いから行動までの距離の長いひとがあるものである。親切は、即興に求められることが多く、腰の重いひとは、即座に応じることができないで、不親切になりやすい。その点では、腰の軽いひとが親切にはむいている。困っていることに気付くと即座に手助けに動くひとである。だが、腰が軽すぎると問題となることもある。場合によると、早とちりして、軽薄に余計なお世話をしてしまうことになる。それでも、間違っていると聞くとまた直ちにその修正にと動くので、腰の軽いひとがよい。

ひとりなら自分が手助けするが、たくさんひとがいると、だれかひまなものが引き受けるだろう、かかわると面倒だし、とためらうこともある。ものごとに主体的にかかわることなく、見物人・傍観者に、野次馬にとどまることが生活習慣病となっている場合、舞台にあがって演技することには不慣れで抵抗を感じるのである。

ものによっては、その親切をきっかけにどんどん関係を深めていく危険を思ったりして躊躇してしまうこともある。「どうせ他人のことだし、なんの責任があるわけでもないし」と。われわれの多くは、「イエス・マン」で、「断る」ことが苦手である。関係をもって、なにかを要求されると、これを安易に引き受けてしまう。「和をもって、貴しとする」聖徳太子の影響下にあつて、断ることで「不和」を生じることがいやなのである。ずうずうしいひとは、このことを周知しているので、親切心に乗じて、どんどんと要求をエスカレートさせる傾向をもつ。そういう独特の悪循環に陥らないためには、ささいであっても、一切の関係をもたないことが一番と考えるのである。

4. 世話好き

親切はささいな手助けだから、そんなに負担の大きいものではない。社交好きなひと

には、負担がすくなくて相手には大助かりの親切は、買ってでもしたい楽しい活動になる。だれかれとなく交わりを求めたがるひとがあるが、見も知らぬひととは、そう簡単に接触できるものではない。ところが、親切は、その見も知らぬひとに手助けをするのであり、社交的なひとには、格好の機会があたえられる。

無償の手助けだが、ささいなものであるのが親切の通常であり、軽い負担で、自分は援助する立場にあって優位をたもちながら社交できるのである。しかも、いやになったら、無償だから勝手にやめる自由もあり、親切は、社交好きのものには、高値でも「買いたい」楽しみになる。

困窮している者には、世話好きは、ありがたい存在である。好んで、自分たちの困窮を手助けしてくれて、それを、負担とするよりは、楽しみとするというのだから、気軽に援助・世話を頼むことができる。

(世話)「世話」とは、手助けが必要と思われるもの(依存的状況にあるひとや動物、ときには植物)に対して、手のかかるその助力を引き受けてそのために働き、力を尽くすことであろう。多くは、身近にいてつきあいのある者に対して、その手助けが必要で手数のかかりそうなことについて面倒を見ることである。

世話の手助けは、親切よりも持続性があり、相手の基本的なあり方にかかわり、その意義は大きい。身の回りの世話をしたり、学校の「うさぎ」の世話をすることは、たまたまの親切とちがい、してもしなくてもいいささいなものではない。欠くことのできない重要なもので、仕事というべきものである。「お世話になっています」とは、しばしば根本的で不可欠の人間関係のなかにおいて言う。ここでの世話は、ささやかでも、たまたまのものでもない。不可欠の手助けであり、本格的に手をわずらわすことである。

親切なお世話は、行きすぎると、否定的にみられて、「余計なお世話」「大きなお世話」となる。世話される者は、依存している者との意識をもつ。独立心に富んだものは、世話の有り様によっては、自己の尊厳が脅かされ侵害されるように感じる。その侵害が感じられるものは、「余計なお世話」となる。親切は、家族とちがい独立した他人に関わるのであるから、とくにこの他者距離を尊重して侵害には注意してはならない。

(お節介)「お節介」は、よけいな手助け、いやがられる介入・干渉の意味である。「世話」は、その言葉自体は肯定的であるが、お節介は、これ自体本質的に否定的なものである。不当な不愉快な干渉である。肯定的に受け入れられる干渉は、「手助け」「親切」「世話」等といわれる。お節介は、否定的に受け取られる干渉にのみ言われる。よいお節介は存在しない。

ただし、深い介入とちがい、ささいで表面的な干渉であるのが普通である。その不快な干渉はあまり本質的な打撃をあたえるものではない(か、そうなる前に拒絶される)ので、「よけいなことをして」とそのお節介になる部分を軽く排除して終結するのが普通である。お節介は、よけいなことなので、手出し自体はできなくて、やむなく口を出すことになる場合が目立つ。見知らぬ者へは、よけいなことは言いにくいので、お節介

は、親切とちがいで周囲の周知した者を相手にすることが多い。身近な者の行為やその計画について、多くは善意からであるが、よけいな口をさしはさんで干渉するのである。

古くは、これが親切の常態であった。個人主義の現代人には、内情にかかわることは干渉であり、お節介だが、かつては、大いに干渉し合うのがふつうで、したがって親切であった。親切は、親切にされる者の微妙な感受性に負うところが大きく、その手助けが余計と思われれば、お節介となり、ありがたいことと受けとめられるなら、親切となる。依存しあうことに慣れた社会では親切なことが、自立した個人主義の社会では、干渉には過敏で、余計なお節介と受け取られる。

(思い込み)「世話好き」も「お節介屋」も、自身が人づきあいが好きなので、みんなもそうだと見なして、かかわる。自立・独立型の人間にとっては、よけいな干渉であるものが、世話好きには、好意や善意の手助けであり、あるべき交わりである。世話好き・お節介屋は、しつけのわるい犬のような生態をもつ。むやみに嗅ぎまわり、じゃれつき、ほえまくって、通りがかりのものに関与しようとする。これを迷惑とする猫の「おみやあらの、世話ずきにゃあ、にゃんとも、あきれるにゃあ」という小言は耳にはいらぬ。

さらには、事実への干渉ならまだ我慢できるが、世話好きは、時に、主観的に勝手に、「隠しているが困っているに違いない」と想像して、的外れな、迷惑な「親切」をしてくる。普通に親切なひとは、相手が迷惑と思っていると察すると、自身には負担の親切だから、即座にこれを停止する。だが、世話好きの場合、親切にすること自体が楽しみになっているので、相手が迷惑がっていても、そう簡単には、これを停止しない。

この世話好きは、意外にも、世話をされることには消極的なときがある。世話され劣等の位置におかれ自立を侵されることに敏感になる場合である。しかし、社交好きのところが勝っている場合は、親切にされることもいたく好む。世話をするすきがなくて交わりができそうにない場合には、逆に相手から親切をしてもらおうと接触を試みる。これは、多くの場合、成功する。困っているといわれ手助けを請われて、これを放置しておくことは気が引けるので、つい親切関係を結んでしまうのである。

5. 優しそうで暇や余裕のありそうなひと

ところで、親切にされる側のひとにも、親切にする人を選ぶ自由があろう。それからいうと、親切にするひとは、また別の特長をもつ。世話好き・お節介屋は、その相手を自らが見つけ出し、親切を開拓する。だが、他方では、親切は、困っているひとの方から求めていくものでもある。

困っているひとが、親切そうなひとを選ぶのである。こういう方面で親切なひととなるのは、多忙な世話やきとはまた別のタイプである。それは、まずは、暇そうなひと・優しそうで余裕のありそうな人ということになる。

(優しそうなひと)選択の余地があれば、やくざ風の者には、親切は請わないであろう。親切な人として選ばれるのは、ひとが近づきやすく怖くない人でなくてはならない。

道案内ぐらいだと、ほかに誰もいなければ、やくぎにでもたずねることがあろうが、親切の内容が「小銭を（貸して）くれませんか」というようなものになると、百パーセント、親切を請う相手にやくぎを選ぶ者はいない。優しい、温厚そうなひとが選ばれる。ばあいによると、自分より弱そうなものを選ぶこともある。ただし、これは、その弱そうな相手と金額次第では、親切を請うというより、恐喝になるから、その辺りをよく注意して選ばねばならない。

「やさしさ」は、人や動植物のみか、物にもいう。物を優しく扱うとは、これを傷つけないように壊さないようにと手加減し配慮してかわることである。ひとや動物に優しくする場合、その心身を傷つけないようにショックや困惑を与えないように、荒々しく粗雑にならないようにし、細やかに気を使い、攻撃的になったり冷酷になることなく、あたたかくおだやかに関わるのである。

親切を請うひとは、困っていて手助けをもとめている。これに応えるひとは、その困っていることをよく配慮でき、こまやかに手助けできる優しいひとであるのが一番であろう。「乱暴なひと」「怖いひと」「きついひと」「冷たいひと」の反対である。攻撃的であったり無思慮・無情なひとには、親切の贈与は期待できない。立腹しているひとに、親切を請うことはあまりない。怒っているひとは、みさかいがなくなっているから、その攻撃の矛先を無関係の者に向けてくるかも知れず、そういうひとには、近づかない方がよい。

(ひまそうなひと) 優しくそうなひとが選ばれる筆頭だとしても、そのひとが親切にする余裕のないことがはっきりしている場合、断念せざるをえない。つぎに選ばれるのは、「余裕のありそうなひと」ということになる。見知らぬ町で、道案内の親切をと親切そうなひとをさがすとき、選ばれるのは、ひまそうな地元の老人や子供であろう。地元のひとと一見して分かっている、優しく親切そうでも、困っていることに注目してくれる暇があり、親切に手助けしてくれる暇がなくては、親切は請うことがむずかしい。

道案内では、地元のお店のひとがいいのだが、忙しそうにしていると、親切をたのみにくくなる。手助けをお願いするのであれば、そうできるだけの余裕のあるひとでなくてはならない。道案内であれば、近くまで連れて行ってくれる暇人が最適である。かつては、その代表は、ひまをもてあそんでいる地元の子供たちであった。

親切は、無償が大原則である。お金もうけ（仕事）の合間の暇を少しもらおうというのである。ボランティアと同じである。暇がないと、親切もボランティアもできない。ボランティアは、仕事をしながらでは無理で、これを中断して暇をそれ用につくる必要がある。しかし、親切は、ほんのささやかな時間があればよいので、工作中でもいい。工作中的のひとにでも、親切は請うことが可能である。

(若干なりとも利他の気持ち) いくら暇があり、余裕があっても、社会的であつても、人のためにひとはだぬごうという気持ちがない場合、ひとへの親切は成立しない。自分のためにしか動こうとしない者は、ひとに無償の援助・手助けをすることはない。こうい

うエゴイストの前では、世話好きなひとなどは、天使のように見えてくる。親切にするひとは、その根本精神として、利己とは反対の利他・愛他の気持ちを若干なりとももっているのである。

見知らぬ者へは、かつては、警戒して、敵と見なすことから始まったが、いまは、違う。見知らぬ者に親切にできる。むしろ、ささいな手助けとしての親切は、そういうひとになされる方が目立つ。世界中の誰であれ、同じ人間として、困っているときは、お互いさまだと、相互扶助的な意識を、なんらかの連帯的共同的意識を、みんなもつことができるようになってきているのであろう。

親切は贈与であり、利他のところをもつが、それは、ほんのささやかな贈与であり、利他というものはずかしいぐらいのことである。敵意や嫌悪の感情が生じなければ、ささいな手助けには、無心に応じる。おそらく、我利我利のエゴイストで通っている者でも、見知らぬ者から求められた親切には、応じる。相手が自分を親切な人間と評価して、親切を求めてきたのである。当人をエゴイストと知る者はそうしないので、むしろ、感激して、はりきるであらう。その程度に利他であれば、親切はなる。

6. 求めるもの（能力）を持っていそうなひと

優しそうで、ひまそうであれば、親切は請えるのかというと、場合によっては、それでは不十分になることがある。他の種類のひとに親切を請わねばならないことがある。「重い荷物の手助けを」という親切は、いくら暇そうでも老人やこどもには頼めないであらう。困っているその内容にふさわしい能力をもったひとが親切なひととして選ばれることになる。

親切は、手助けという行為を求めているのである。好意や優しさの気持だけでは、どうにもならない。最後は、無愛想なとつきにくそうな相手であったとしても、かれに親切を乞う以外ないことがある。列車の乗換えが不明なとき、優しそうな乗客に親切を請うこともいいが、確かなのは、いそがしそうでも、無愛想でも駅員に聞くことである。なにごとも、その道の専門家がいるもので、求める親切の内容に見合った、それにふさわしいひとが選ばれねばならない。親切は、結局は、困っていることについて手助けを請うのであり、単に他人とふれあいを求めているのではない。単なるふれあいなら、優しく暇そうなひとでいいが、肝心なことは手助けであれば、それができそうにない者は選ぶわけにはいかない。無愛想で冷たそうであっても、暇がなくて忙しくしていても、そのひとしかその手助けに相応しいひとがいなければ、この人に親切をお願いすることになる。

お金が必要な場合は、金銭に余裕のありそうな者が選ばれることは、いうまでもない。困っているひとの求めるものを、あり余るほどもっている余裕のあるひとであることが望ましい。こどもに、お金での親切を請うことはあまりない。裕福そうな紳士風の者が一番であらう。たばこの火を求めるのに、こどもに親切を請うものもない。やくざに

請うこともない。茶パツの「お兄さん」ぐらいが一番であろう。手助けしてもらえることが前提であって、その視点から親切の相手をさがし、接触しても弊害が少なそうなひと、優しく、ひまそうな者を選ぶのである。

(**ほどほどの能力者**) 手助けを求めるのだから、そのための能力に長けたものにこれを請うといいのだが、単純にそうはいかないこともある。ささいなことを親切では求めるのであり、しかも無償が大前提であるから、トップの有能者であるより、ほどほどの方が遠慮がなくてよいというような場合がある。

パソコンについて初心者として親切を請うのは、自分の家では、パソコンウィルスも作れる息子にであるが、そとでは、ウィルスの被害者にしかなれないレベルのものに聞くのが一般である。無償でやってもらうのだから、専門家に、初級の内容について親切を請うのは、事と状況しだいでは、「馬鹿にして!」ということになりかねない。

ほどほどの能力者に親切を請うのは、自分について知られたくないということもある。初級のパソコンの能力しかない相手なら、自分の無能を恥ずかしがらず、気軽にどんどん親切を請える。深くは考えないこどもになら、恥ずかしがらずに、売春街の横にある教会のある方向をたずねられる。

(**それを仕事にしていない人**) いくら手助けしてもらうに適切なひとだと分かっているも、親切を請うてはならないひとがある。それを有償の仕事にしているひとである。列車からおりて、重い荷物をはこんでくれるひとには、それを仕事にしようと控えている「赤帽さん」が一番であるが、これに無償の親切を請うことはできない。

ただし、親切と同じ事柄を、無償で仕事としてやっている場合は、親切な素人よりは手慣れていて頼もしいはずで、大いにこれを頼むことになる。町の案内については、これを親切に任せておくのでは旅行者には不親切なことになるので、公設の案内所とか交番がこれを仕事の一つにしている。この交番や案内所での「道案内」は、だが、親切に属するものではない。かれらには、それが仕事であり、案内する義務・責任がある。そこで親切をいうとしたら、その案内の仕事以外についてということになる。交番での道案内は、仕事であり、親切に属さないが、そこで同時に、電話を貸してもらおうとか、水筒に水をわけてもらう等があれば、それらは、交番の仕事外のことがらであって、それが親切ということになる（もちろん、案内の仕事であっても、仕事（並みの対応）をこえて思いやりをもってする場合は、その分は、親切ということになる）。

7. 通りすがりの者

親切なひととは「通りすがりの者」であるなど、どうでもいいではないかと言われようか。だが、これは、親切と親切な人間のかかなり本質的な特徴になる。親切は、たまたまに生じている困惑に偶々そこに居合わせている余裕のある者がささやかな手助けをすることである。親切の場は、偶然的なものであり、そこに居合わせている他人が即興にこれに応じるのである。行きずりのひとが親切にするのである。親切の相手の条件は、

なにになるかということ不要なものを捨象すると、友人でなくてもいいし大人でなくてもいいしと、すべてを捨象して最低限必要なものとして残るのは、とにかく、その場に居合わせていなくてはならないということぐらいである。つまりは、純粋な親切は、通りすがりの者がするのである。

親切は、これをはじめから予定することは、あまりない。困ることになると分かっている場合は、予め準備する。「花粉情報」で鼻水が相当に出ると予想できれば、困らないように多くのチリ紙を用意し、道が分からないのなら、予め地図を読んでおいたり、これを持参する。かりに自分では準備できないとしても、予め分かっていることには、ボランティアを頼んでおくとかの手はずを整え、親切を請わなくてもよいようにする。親切に残されているものは、たまたまその場で生じるささいなアクシデントの類いのものとなる。アクシデントも大きなものになれば、専門家に頼むことになるから、ほんのささやかなものを親切では請うのである。

(たまたまその近くに居合わせたもの) 親切の内容は、たまたま生じた、ささやかな困惑に対するものであり、周囲にひとがいなければ、我慢し、なしで済ませられるようなものである。たまたまそばにひとがいるので、即興にと負担のない手助けを求めるのである。負担でないからこそ、そこに居合わせた赤の他人に無償でこれを請えるのである。

いくら優しくてひまそうだからと、三里先の山寺の良寛和尚に電話して、駅構内のどこかにあるらしい手まり売りの案内に来てくれないだろうかと親切を請うても、おそらくは、よい返事はもらえない。若干ふさわしくなくても、その同じ場所にいわせているひまそうなサッカー少年たちに親切は請うべきである。親切は、たまたま生じる困ったことについて、その現場で、そこに居合わせている、通りがかりのひとに請う。是が非でもというものは、自分で予め用意したり、専門家に登場を願って本格的に取り組んでもらうことになる。かりに親切と時間的には差がないものを無償で手助けしてもらおうとしても、計画的に取り組む、あらかじめお願いしていたようなものは、奉仕とかボランティアといったものに属することになる。たまたまに生じる困ったことについて、通りすがりのひまなひとが、たまたまに手助けするのが純粋な親切である。親切は、ささやかな手助けを行きずりのひとに請うのである。

新幹線では、見知らぬ者に席を譲ることは一般的ではないが、ときには譲る。負担の大きさは、ささやかな親切を超える。負担の大きい無償の手助けは、多くの場合、奉仕とかボランティアと言われるものになる。しかし、新幹線で席を譲る場合は、負担は大きくそれはボランティアと変わらなかったとしても、奉仕でもボランティアでもなく、やはり、「親切」と言われる。その活動が奉仕やボランティアといわれるものの場合、予め計画して本腰をいれて取り組むものになるからであろう。親切は、たまたまに生じた困惑に、偶然にそこに居合わせて余裕ある者が即興的に手助けをするのであり、計画的な営みではない。新幹線で席を譲るのは、負担は大きすぎるのであるけれども、たまたま行きがかりとなった者が即興的に応じるという形式において、ボランティアでも奉

仕でもなく、「親切」と見なされるのではないか。

(近づこうとするひとの場合がある) 親切にするひとが行きずりの他人であるということは、親切にされる人も同一で行きずりの他人になるはずである。だが、そうでないことがある。親切にする相手に故意に近づくために、行きずりを装うことがある。親切は、怪しまれずに他人に近づける数少ない機会である。接近して懇意になるきっかけをつかめるので、親切を利用するのである。そういう下心をもったひとが親切をするために心がけることは、第一に、その目的とする相手の近くに居合わせるようにすることである。「赤ずきんちゃん」に接近しようと、「親切」をねらったおおかみは、何食わぬ顔をしてたまたまに出合ったかのように装って、通りがかりの道端に待ち伏せしていた。近くにいるようにしないと、親切にはできないからである。

たまたま近くにいることが固定している他人もある。隣近所である。わざわざに隣になるのを選ぶということはまれで、たまたまの赤の他人同士が隣近所になるのである。ここでは、親切が交わりの形式として尊重される。親切は、ささやかで表面的な交わりであり、他人であることを超えないで、しかも、好意的に贈与的にふるまうのである。隣同士でぎくしゃくしないためには、好意の表現としての親切は、重宝である。

8. 不親切な親切な人

今の時代、余裕のあるひとはたくさんいて、困っているといえ、多くのひとが親切にしてくれる。世話好きもたくさんいる。こういう状況下では、自立心にとぼしい依存人間は、過度にひとに頼っていくことになりかねない。親切は控える方がよい場合が多くなっている。

親切は、独立した個人のあいだのささやかな手助けなのだが、この手助けが無闇になされると、つまり過度の親切は、これに依存して生きる寄生虫的存在を生み出すことになる。どこにいても、いつでも、誰かが親切にしてくれるということで、親切を当然と見なして、これを頼りにするパラサイト(厄介者)をつくる。

登山するとき、自立した人間なら、天候を考え万全の装備をして入山する。暴風雨になっても、自分で対処することを当然とする。だが、最近、世の中、余裕があってみんな親切なので、誰かが親切に手助けしてくれるだろうと安易な気持ちで携帯電話を片手に山に入る。風雨への備えもなく、食料の予備もなく、少し難儀すると、安易に頼ってタクシーがわりにとヘリコプターを呼んで平気である。親切にすると、ますます甘えて、自分での準備をますます怠るようになる。ごみもボランティアが回収するから平気で放置する。

(不親切が親切になる) そういう意味では、ほどほどの不親切は、必要なことかもしれない。自立精神をさまたげ、怠惰をすすめるような親切は、これをひかえるのが、それこそ深い思いやりであり、大局的な親切になるということである。

JR西条駅で、「ちょっと、おにいさん、広島大学はどこにあるのさ」とたずねるよ

うなパラサイト族には、「あつこに、案にゃあ板があるけえ、自分で調べんしゃあ」と親切に無視するか、親切に駅横のブルーバールの始点まで案内して、「こりょお、まっすぐに行きゃあ、ええんです」と一里あまり山越えの道を歩くことをすすめ、怠け心をしっかりと反省させるべきである。

そうしないと、いずれ、北海道の原野の無人駅に立って、「あらあ、この近くにはホテルはないのお」と見回して、北きつねの嘲笑の目にしかであえない、その遠因を作ることになる。そういうひとには、不親切こそが、親切なのである。安易に親切なひとは、自立をさまたげて、いずれは当人を周囲から迷惑がられ嫌われる寄生虫にしてしまうから、根本的には不親切ということになる。

(**モットーとしての不親切**) むやみには、親切にしないし、親切にされることもない人がある。「小さな親切、余計なお世話」と不親切をモットーにするひとである。独立自尊のひと、孤高に生きようとするひとは、世話という依存をできるだけ避けようと心がける。

親切は、なければならぬで済ますことのできる、行きずりのたまたまのささいな世話であり、交わりのわずらわしいひとは、そういう余計なものは、なしですませたいと思う。むやみに嗅ぎまわり吠えまくる犬の生き方に与する世話好きやお節介屋の敵である。猫の生き方を是とし、ほえつく犬どもを「おみやあらの、お世話にゃあ、にやりとおは、にゃあ」と屋根のうえから見下すのである。こういう不親切を生活上の信念とするひとは、山奥の広島大学も北海道の原野の無人駅から一番近いホテルも自分で詳細に調べて自分で処理し、困ることがなく、ひとには頼らず迷惑もかけない。

(『HABITUS』(西日本応用倫理学研究会) 通巻 11 号 1~17 頁 平成 16 年 11 月)